

多田 千尋
(Tada Chihiro)



1961年、東京都生まれ。明治大学法学部卒業後、モスクワ大学系属プーシキン大学に留学。近年は、保育カリキュラムの研究や高齢者福祉におけるアクティビティケアに取り組む。また、「おもちゃコンサルタント」を全国に3,000人養成し、さらに、要介護高齢者の生活の質を高める「アクティビティディレクター」を500人養成し、高齢者福祉施設のQOL指導や小児病棟のおもちゃライブラリーの運営も行う。2008年4月には、新宿区と文化協定を結び、戦災を免れた歴史的建造物である廃校に「おもちゃ美術館」(東京・新宿四谷)を開設する。

現在、芸術教育研究所所長、おもちゃ美術館館長、高齢者アクティビティ開発センター代表、早稲田大学講師、日本福祉文化学会副会長、文部科学省中学校家庭科学習指導要領策定委員、TBSラジオ「子ども電話相談室」回答者、文化庁芸術選奨推薦審査委員、著書に『高齢者の遊びをデザインする』(一橋出版)、『赤ちゃんと楽しむ手作りおもちゃ』(池田書店)など多数。

子どもの「遊び力」が危ない

芸術教育研究所 所長 多田千尋

今、子ども時代に獲得しなければならない様々な「力」が危ない。その懸念の一つが「遊び力」だ。「子どものときに一生懸命遊ばないと、大人になって一生懸命仕事は出来ない」とある精神科医が述べているが、人間の基礎をつくる子ども期の遊びは大切だ。世の中では、基礎学力の低下が心配されているが、遊び力の低下のほうがよっぽど気懸かりだ。

ハイテク玩具など優秀すぎるおもちゃによって、子どもたちが自ら楽しみを作り出すことをさぼり、受け手に徹してしまっている現状は心配である。面倒見の良いおもちゃによる手厚いケアを受けすぎ、「遊びの天才」たちが腑抜けにさせられているのであれば、こんなに罪深い話はない。

また、遊びの天才たちの「遊び仲間」の崩壊も深刻だ。子どもたちは集団遊びが薄れ始め、部屋に三人集まっても、一人遊びが三人いるだけだ。テレビゲームに熱中する子ども、漫画を読んでいる、違うゲーム機で遊んでいる子どもなど、各自が自分の世界で楽しむ。おもちゃのハイテク化によって、多くの楽しみを享受してきたが、失うものも大きかった。友だち同士のコミュニケーションの絶対量や人間同士がもみ合う、もまれ合うといった歓迎すべき文化摩擦が少なくなっている。

さらに、子どもとお年寄りの世代間交流の希薄さも気になる。遊びの伝承文化が完全に断ち切れてしまったからである。昔は各家庭が遊びを通じた多世代交流センターだった。昔のお年寄りは子守り役だけでなく、遊び文化の伝承者でもあった。

遊びを通じた同世代、多世代の人間研究は、子ども時代の総合学習であり、必修科目である。日本の社会が少子化しても、子どもの遊び仲間は少子化してはならない。豊かな人間関係と手応えのあるおもちゃに支えられた「遊びの天才たち」が、日々、天才振りを発揮出来るような世の中になることが大切だ。